

米国における多文化音楽教育の実践に関する一考察

— *The Music Connection* (1995) を中心に —

川村 恭子

(本講座大学院博士課程後期在学)

A Consideration of Practice of Multicultural Music Education in United States: Focusing on *The Music Connection* (1995)

Kyoko KAWAMURA

1. はじめに

多文化教育研究の第一人者である Banks によると、米国における多文化教育は、米国内のエスニックや文化の多様性を理解すること、異なる文化の理解を通して一国内で共生するための知識、態度、スキルを獲得すること、文化的マイノリティに対する差別をなくすことを目的としている¹⁾。また、先駆的に多文化音楽教育研究を行っている Campbell は、多文化音楽教育に関して次のように述べている。多文化音楽教育とは、人種、民族の起源、年齢、階級、性、宗教、ライフスタイルによって特徴づけられるグループの音楽を学習することである²⁾。以上より、一般的に多文化音楽教育の目的も、多様なエスニック・グループとの共生をめざす国民統合の理念を実現することであるといわれている³⁾。つまり多文化音楽教育の実践では、世界の様々な国、地域、および民族の音楽を単に学習することの明確な区別を要すると考えられているのである。このような目的を有した多文化音楽教育の実践を行なう場合、教師が音楽科教科書を使用する可能性も十分に考えられる。米国における多文化音楽教育の教育観を明らかにする際に、音楽の文化的側面がどのように扱われてきたかを明らかにすることは非常に重要であり、多文化音楽教育の歴史の変遷を明らかにするうえでも意義があるといえる。

米国の代表的な音楽科教科書として Silver Burdett 社のものが挙げられるが、多文化の音楽に初めて焦点が当てられた教科書として、同社が 1988 年に出版した *World of Music* が挙げられる。高萩は、多文化的なアプローチが強調されている本教科書が、異なる民族の音楽理解に向けた試みの 1 つであると述べている⁴⁾。西洋音楽を中心に行われてきた従来の音楽教育に対して、1960 年代後半から西洋音楽以外のジャンルの音楽に関心が持たれ始めた。それにともない、1972 年には *Music Educators Journal* において *World Music* の特集が、1983 年には多文化音楽教育に関する特集が生まれ、音楽の諸要素の学習に加えて、文化的側面の学習の重要性についても主張する音楽教育者が現れるようになった。このように、音楽教育界全体が *World Music* や多文化の音楽の導入に対して積極的な姿勢を見せ始めた頃に *World of Music* は出版された。しかし学習の内容は、従来の音楽教育と同様に音楽の諸要素に焦点が当てられたものが多く、その目的はあくまで音楽の理解であった。つまり当時の多文化音楽教育は、多文化的なアプローチから教科書の作成や音楽の学習が行われていたというよりも、*World Music* や多文化の音楽を音楽教育に取り入れることによって教材の多様化を図り、多様な音楽に対する理解を促すことを目的としていたのである⁵⁾。その後、多文化音楽教育に対する議論が盛んに行われ、多文化音楽教育が一般化してきた 1990 年代になると、音楽科教科書においても「文化」に着目した学習項目が設定されるようになる。

「文化的関連」といった項目が初めて明記されたのは、1995 年に Silver Burdett 社から出版された *The Music Connection* (1995) であるが、この教科書を出版するにあたって Campbell は、歌唱、ダンス、楽器演奏などの学習において、音楽的そして文化的特徴の両側面をバランスよく取り入れることの重要性に関して言及している。このことから、音楽教育において音楽の諸要素の学習に終始せず、文化的側面の学

習の必要性が認識されていることがわかる。

したがって本研究では、文化的側面からの学習が導入された *The Music Connection* の教師用指導書を用い、まず「文化的関連」の学習内容を抽出する。次に巻末資料から多文化的な視点を含んだ資料に焦点を当て、文化的内容がどのように扱われているのかを明らかにする。以上を踏まえて、それらの学習活動に多文化的な観点がどのように反映されているのか、また、多文化音楽教育における *The Music Connection* の位置付けを明らかにすることを目的とする。

II. 関連学習における多文化的視点

The Music Connection では、指導内容の他に参考資料として、「文化的関連」、「統合カリキュラム」、「相互学習」などの項目が設定され、内容に応じた資料が各レッスンに記載されている。副次的な活動に関しては、技能という項目が設けられており、レッスンに関連した読譜、器楽、創作、歌唱、オルフなどの活動が紹介されている。ここでは、参考資料の1つである「文化的関連」に焦点を当てる。まず、*The Music Connection* における分布傾向について以下の表に示す。

表1 3つのセクションにおけるレッスン数

	Concepts	Themes	Reading	計
Grade-K	64	113	23	200
Grade-1	79	95	68	242
Grade-2	73	75	68	216
Grade-3	70	70	67	207
Grade-4	76	62	64	202
Grade-5	73	73	62	208
Grade-6	76	67	68	211
Grade-7	76	60	43	179
Grade-8	43	64	73	180

表2 3つのセクション⁶⁾における文化的関連の割合

	Concepts	Themes	Reading	全体
Grade-K	6.2%	8.8%	0%	7%
Grade-1	8.8%	11.5%	0%	7.4%
Grade-2	21.9%	10.6%	0%	11.1%
Grade-3	10%	22.8%	1.4%	11.5%
Grade-4	15.7%	37%	0%	17.3%
Grade-5	41%	41%	6.4%	30.7%
Grade-6	21%	10.4%	1.4%	10.4%
Grade-7	14.4%	33.3%	20.9%	22.3%
Grade-8	23.2%	2.9%	6.8%	10%

Grade-K から Grade-6 までを概観すると、低学年では文化的関連の学習内容がわずかであるのに対して、学年が上がるにつれてその割合も増加する傾向にある。またその内容も、低学年ではより学習者の生活に即した学習内容に対して文化的関連の解説が多くみられ、取り扱われている地域もごくわずかである。学年が上がるにつれ、除々に取り扱われる地域や音楽のジャンルが増加し、学習内容も幅広いものとなっている。

しかしその一方で、Grade-6 では「文化的関連」の割合が減少傾向にある。しかし、後述する「多文化的情報」という項目においてその占める割合は高く、教師は学習内容を補うことが可能であると推測できる。また、Grade-8 でも文化的関連の学習の割合が減少傾向にあるが、Grade-8 においても「多文化的情報」の占める割合が高いことを鑑みると、一概に学習内容が簡素化されているとは考え難い。また文化的関連の割合が減少している要因の1つとして、Grade-7 以降、若干ではあるが教科書の構成が変化し、記載されている参考資料の場合、文化的関連以外の項目が新たに設定されていることが挙げられる。そのなかでも特に「文化的関連」と類似する参考資料として「背景の情報」が挙げられる。ここでは、「文化」とは明記されていないものの、歴史的な背景や教材の解説がなされており、この参考資料を用いて文化的な内容を教師が教授することが可能となっている⁷⁾。

次に、抽出した「文化的関連」の学習内容をいくつかの項目に分類し、分析・検討を行った。分類項目を以下に示す。

表3 文化的関連の分類項目

項目	項目の概要
様々な国および地域の地理や文化	地理的な学習内容、および世界の様々な国や地域だけでなく、そこに居住している民族やその土地の生活習慣、風土、文化などを取り扱った学習内容
音楽	音楽のジャンル、諸要素、楽器などを取り扱った学習内容
ピープル	民族に留まらず、人種や個人に至るまでの様々な人々に関する学習内容
偉人	偉人に関する学習内容
行事	様々な行事に関する学習内容
社会問題	国際問題を含む、様々な社会問題を取り扱った学習内容
生活	人々の日常生活と関連のある学習内容
生物および食物	動植物を取り扱った学習内容
言語	様々な民族の言語に関する学習内容
文学	物語、詩を取り扱った学習内容

(1) 「様々な国および地域の地理や文化」の学習内容

「様々な地域および文化」に関する学習内容は、すべての学年を通して取り扱われており、Grade-6以降は学習内容の量が大幅に増加している。内容に関しては、全学年を通して地理的な内容を確認する学習が提案されており、世界の様々な国や地域の衣食住に加えて、徐々に文化、音楽文化、歴史、伝統などの内容が扱われるようになってきている。また、現在の様子だけではなく、建国時代の歴史を学習するなど、歴史を遡って過去の文化や出来事を理解する学習が提案されている。

(2) 「音楽」の学習内容

「音楽」に関する学習内容は全学年で取り扱われており、その内容も非常に豊富である。特に、ゴスペル、労働歌、黒人霊歌などアフリカ系アメリカ人を含む米国の民族と関連のある音楽を含む学習が多くみられる。黒人霊歌をはじめとする多くの音楽のジャンルがここでは扱われているが、どの学年においてもそれらの歴史が詳細に記載されている。特にGrade-5では繰り返し黒人霊歌に関する資料が提示され、その都度新しい情報が追加されている。また、一貫して世界の様々な民族の音楽が取り上げられており、音楽と民族の関わりや彼らが用いる楽器に関する記述が多くみられた。その他には、音楽の様式や楽器の学習、そしてそれらの楽器を用いた演奏が多く盛り込まれている。様式や楽器の学習においても、音楽の諸要素の学習に留まらず、その背景にある歴史や文化の学習が提示され、以前学習した内容との比較学習も提案されている。また、世界の様々な民謡や舞踊の学習では、それらの役割と民族との関係を学習することによってより深い理解を促している。

(3) 「ピープル」の学習内容

「ピープル」に関する学習内容はGrade-1以外の学年で取り上げられている。ここでは世界中の民族が紹介されているが、多くを米国内の民族が占めている。このことから、米国内に存在する多様な民族を知り、理解することが求められていることがわかる。また、民族の紹介と関連させた内容として、衣食住に関する内容、音楽文化、歴史等も学習内容も含まれている。民族以外の「ピープル」には、例えば移民、カウボーイ、楽曲の作曲者、聖歌隊、世界各地の子どもたち等が含まれる。

(4) 「偉人」の学習内容

「偉人」に関する学習内容が含まれているのは、Grade-5のみである。ここで挙げられているのは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr) であり、彼は公民権運動の指導者的役割を果たした活動家である。「文化的関連」では彼はGrade-5で取り上げられるに留まっているが、「多文化的情報」のなかでは他の学年においても幾度となく登場している人物である。

(5) 「行事」の学習内容

「行事」に関する学習内容は、Grade-1以外の学年に含まれている。「行事」に関する学習内容は、米国

内のものに留まらず世界各国の祭りや祝日を取り上げられており、高学年になると様々な国や地域の行事を比較しながら、同様の行事における文化の相違の理解が目的の1つとされている。特に、黒人の権利運動の1つとして生まれたクワンザは、どの学年においても度々取り上げられている。

(6) 「社会問題」の学習内容

「社会問題」に関する学習内容は、Grade-5で取り扱われている。他の学年においても多少触れられている場合もあるが、学習内容が容易ではないため、年齢や理解度を考慮した上で設定されていることが伺える。ここでは、公民権運動や奴隷解放に関する内容が多く取り上げられている。これらの学習は、高学年になるにつれて学習者自身が自発的に学習していくことが求められており、自ら調査を行い他者と話し合いを行う学習や、他教科と関連させながら社会問題への理解や考えを深めていく学習が提案されている。また、教科書全体を通してアフリカ系アメリカ人に関する内容が多くを占めていることや、Grade-7以降では多文化教育と関連させた内容が扱われていることから、より身近な問題としてこれらの学習を捉えようとしていることがわかる。

(7) 「生活」の学習内容

「生活」に関する学習内容は、Grade-KからGrade-5にわたって含まれている。主に学習者の日常生活と深く関連のある事項が多く取り上げられ、例えばGrade-KおよびGrade-1では、子守歌や日常のなかで子どもたちが歌うゲーム、民話などが含まれ、学習内容は低学年ほど多い傾向にある。また、学年が上がると学習者の身の回りに留まらず、様々な地域や民族の生活と関連させた学習に移行している。

(8) 「生物および食物」の学習内容

「生物および食物」に関する学習内容は、Grade-1、Grade-3、およびGrade-5に含まれており、子どもたちがより興味関心を示すような楽曲が選択されている。またGrade-1では、音楽に合わせて動物の鳴き声を真似る学習や、リズム学習が提案されている。Grade-3およびGrade-5でも「生物および食物」に関する学習内容が取り上げられているが、Grade-1までの内容とは異なり、諸民族の生活や文化と直接関わりのある学習内容となっている。

(9) 「言語」の学習内容

「言語」に関する学習内容は、Grade-1、Grade-2、Grade-4、Grade-5、およびGrade-7で設定されている。「言語」の学習内容では、非日常的な言語が多く取り上げられているため、ある程度理解可能な年齢から発展学習が開始されている。ここでは世界中の国や地域の言語が紹介され、授業で使用される楽曲の歌詞に合わせて様々な言語で挨拶を体験するといった学習内容となっている。Grade-7では、発展的な学習内容として言語の歴史や言葉の由来などが紹介されている。

III. *The Music Connection* における多文化的情報

The Music Connection の特徴の1つとして、巻末資料の分類索引に「多文化的情報」の項目が明記されていることが挙げられる。Grade-Kの段階からどのレッスンにおいて「多文化的情報」が取り入れられているかが一目で分かるようになっている。また、前述した参考資料である「文化的関連」および「統合カリキュラム」の学習内容と照らし合わせるよう指示がある⁹⁾。しかし、「文化的関連」のようにその資料が各レッスンのなかで明記されているわけではなく、あくまでそのレッスンで提示されている楽曲および学習内容全体に対して、多文化的情報が含まれていることを示唆しているのである。

表 4 多文化的情報が占める割合

	Concepts	Themes	Reading	全体
Grade-K	10.9%	16.8%	0%	13%
Grade-1	12.6%	12.6%	0%	9%
Grade-2	10.9%	24%	0%	12%
Grade-3	0%	45.7%	0%	15.4%
Grade-4	17%	54.8%	4.6%	26.7%
Grade-5	19.1%	9.5%	1.6%	10.5%
Grade-6	34.2%	38.8%	8.8%	27.4%
Grade-7	18.4%	18.3%	6.9%	15.6%
Grade-8	34.8%	45%	5.4%	26.6%

前述したように、「多文化的情報」では参考資料である「文化的関連」のように具体的な内容が示されてはいない。しかし、どのような学習内容を「多文化的情報」と位置付けているかを明確にすることは、多文化音楽教育が目指す方向性を熟考する上でも非常に重要であると考えられる。「多文化的情報」を含むとされる学習内容は非常に多岐にわたるが、特徴として「文化的関連」の割合が減少すると、これを補うように「多文化的情報」の割合が増加することが挙げられる。したがって、「文化的関連」および「多文化的情報」の相互活用によって、より教師の目的に沿った学習内容の提示が可能であると考えられる。

「多文化的情報」とされている学習には、米国内に限定されない世界の様々な地域や国が挙げられており、それらの音楽の起源、伝統、歴史、また取り上げられている地域の人々の生活に関する学習が多く含まれている。一貫して、様々な民族や国の音楽は取り扱われているが、低学年の間は、世界の様々なゲームや挨拶、祭りなど、日常生活と密接に関わる事柄が多くみられる。また、学年を追うごとに音楽や楽器の起源を探る等の歴史の学習が増加し、多文化教育を語る上で重要な人物も度々取り上げられている。このような「多文化的情報」の明記は、多文化的視点を含む学習がいかなるものかを示す1つの指針となっているのである。

IV. 「包括的なテーマに関する計画」における多文化的視点

The Music Connection では、教師が統合カリキュラムにおいて主題に沿った教授をする際の援助として、巻末に「包括的なテーマに関する計画」が設けられている。ここでは、学習内容が様々なテーマによって分類され、分類項目は各 Grade によって異なり学年が上がるとともに分類項目も増加し、学習内容も高度になる傾向にある⁹⁾。多文化的な視点を含む分類項目としては、米国に関する内容、他民族の文化および言語、米国内の音楽が含まれていることが挙げられる。例えば、一貫して設定されている項目として「黒人霊歌」が挙げられ、その他、頻出する項目として「世界中の人々」、「自由」、「公民権運動」および「労働歌」が挙げられる。特に Grade-7 では「多文化主義」、「奴隷」、「自由」といった多文化教育とも関連の深いテーマが取り上げられている。また、ここで取り上げられているテーマは、教師が学習内容を拡大していくための枠組みの基礎であると記されている¹⁰⁾。つまり、枠組みの基盤を提供することによってさらなる発展的な学習を促すことを目的としているのである。

V. 多文化音楽教育における *The Music Connection* の位置付け

以上のように、参考資料のなかから「文化的関連」の内容を、さらに巻末資料から多文化的視点を含む学習内容を概観し分析・検討した結果、以下の特徴が明らかとなった。

第1に、音楽の諸要素の学習に比重が置かれていた学習¹¹⁾ から、文化的側面を取り入れた学習¹²⁾ の重要性の認識が拡大している点である。これまで MENC (The National Association for Music Education) から多文化音楽教育に関する授業計画集が多数出版されている。しかし、それらの授業計画集で提示されている文化的内容の多くは、学習内容が非常に乏しい。全米芸術教育標準と関連を持たせた授業計画集においても、以前の計画集と比較すると文化的内容に関する学習が増加してはいるが、その範囲は狭く十分な学習が可能になっているとは言い難い。このような状況と比較すると、多文化音楽教育のために出版され

たわけではない *The Music Connection* ではあるが、多様な視点から様々な民族の音楽を学習するだけでなく、その歴史や起源、また音楽文化に関して学習する機会を学習者に提供しようとしていることは、より文化的側面を含んだ音楽の学習の必要性が認識されてきたことを示しているといえよう。

第2に、多文化的な視点を有した学習を取り入れようとする動きがある点である。*The Music Connection* では、参考資料である「文化的関連」に留まらず、多文化的な視点を有した巻末資料として「多文化的情報」が取り扱われている。Silver Burdett 社では、過去に多くの教科書が出版されているが、巻末資料に「多文化的情報」といった多文化音楽教育と関連のある項目が明記されたのは *The Music Connection* が初めてである。1980年代後半から多文化音楽教育に関する議論が活発化し、多文化音楽教育に関する様々な授業計画集や著書が出版され、1994年にMENCによって定められた全米芸術教育標準においても、多文化的な音楽教育の考え方が取り入れられている¹³⁾。しかし、多文化音楽教育の確固たる実践方法は確立しておらず、音楽の諸要素に比重を置いた従来の音楽教育との差異は明確ではなかった。このような状況にあった音楽教育において、*The Music Connection* のなかで多文化的な視点を有した巻末資料が作成されたことは、多文化音楽教育とはどのような学習内容を設定すべきかという疑問を解決する1つの手立てとなっているのである。

第3に、長期的な構想を持った指導が可能になることである。Grade-KからGrade-8までを概観すると、米国をはじめとして世界の様々な地域、国および民族が取り上げられ、その内容も音楽の諸要素の学習に留まらず、衣食住に関わる内容や、音楽、国および民族の歴史など多岐にわたる。これらの学習内容は、学年を追うごとに発展的な学習となり、異なる学年で同様の学習項目が提示される際にもさらに踏み込んだ学習内容が設定されている。また教師の指導に関しては、多文化音楽教育を実践する際の問題の1つとして教師の指導力不足が挙げられている¹⁴⁾が、どのGradeにおいても参考資料として挙げられている「文化的関連」の内容が詳細に書かれていること、また多文化的な視点を有した資料が数多く掲載されていることは、上記の問題に対して教師の指導力不足を解決する糸口になるであろう。

以上のような特徴を有する *The Music Connection* であるが、関連学習のなかに「文化的関連」の学習を取り入れるレッスンには明確にその内容が記載されているものの、該書自体は音楽の諸要素の学習を中心として構成されている。しかし、「文化的関連」や「多文化的情報」の掲載からも、これからの音楽科教育において多文化の音楽を積極的に取り入れていくことや、音楽の理解に留まらず多文化的な視点からの指導が必要であるという認識が高まってきたとも考えられる。したがって、多文化的な観点から *The Music Connection* を捉えるならば、文化の学習が明記されている点、多文化的な視点がいかなるものかを提示している点において、音楽教育における多文化音楽教育の可能性を大いに拡大した教科書であるといえる。

VI. おわりに

米国において多文化教育の重要性が高まるなか、音楽科教育においても多文化的な学習を進めていくための手がかりが *The Music Connection* のなかに多分にみられた。しかし、その実践は教師の力量に委ねられている部分が非常に大きい。巻末資料を利用する際には、具体的な学習内容が明記されていないため、その情報を基に多文化的な視点を獲得できるような学習内容を教師自身が設定しなければならない。このような問題は今日使用されている教科書である *Making Music* に対しても同様の指摘をすることができる。今後は、現在MENCから出版されている多文化音楽教育の授業計画集も含めて、多文化音楽教育がどのような方法で実践されているのか、また現在の多文化音楽教育が何を目指しているのかを明らかにしていきたい。

註

- 1) Banks, J. A., *An Introduction to Multicultural Education 4th edition*, Allyn and Bacon, 2008, pp.1-3.
- 2) Campbell, P. S., "Marked and Molded by Multiculturalism", *American Music Teacher*, Vol.42, No.6, 1993, p.15.
- 3) 磯田三津子「北アメリカにおける多文化音楽教育概念の分析的検討」『学校教育学研究論集』第2号、東京学芸大学、1999、p.51.

- 4) 高萩保治『音楽教育の国際化 比較教育研究へのアプローチ』音楽之友社, 1995, p.52。
- 5) 川村恭子「米国における多文化音楽教育の実践に関する研究－World of Music (1988) を中心として－」中国四国教育学会第 62 回大会 (於: 香川大学) 発表資料, 2010。
- 6) 指導書は, Concepts, Themes, Reading の 3 つの主要なセクションから成る。Concepts は音楽の構成要素, Themes は生活経験, Reading は読譜能力の育成をそれぞれの学習のテーマとしている。
- 7) 例えば, ブルースやゴスペルを扱うレッスンでは, これらの音楽的諸要素だけでなく, 歴史の解説が記載されている。
- 8) 「文化的関連」の項目に留まらず, 「統合カリキュラム」の項目の学習内容が多文化的な視点を含む場合もある。
- 9) 例えば, 「環境」という項目では, 学年が上がると「リサイクル」や「環境保護」といった発展的な内容に変化している。
- 10) 各指導書の「包括的なテーマに関する計画」において記されている。
- 11) Silver Burdett 社では, これまで多くの音楽科教科書が出版されてきた。文化に着目した初めての教科書として 1988 年に出版された *World of Music* が挙げられるが, *The Music Connection* のように「文化的関連」と明記されているわけではない。また, それ以前の教科書では音楽の構成要素についての系統的な学習をカリキュラムに盛り込んでいる。また, 教科書の構成からも, 音楽の諸要素の学習を中心としていることが分かる。
- 12) 本研究で使用する「文化的側面を取り入れた学習」は, 限定されない様々な地域, 国, 民族の文化そのものを学習すること, 「多文化的な視点を有した学習」は, より多文化音楽教育の目的を達成しようとする学習であると定義する。
- 13) 全米芸術教育標準の序文では, 「文化的多様性を取り入れた標準」の中で, 米国が多様な文化, 伝統, およびバックグラウンドを有した人々から成ること, またその多様性の学習を学校教育に取り入れるべきであること, さらに民族性, 習慣, 伝統, 宗教, およびジェンダーの問題も扱うべきであると言及されている。
- 14) Emmanuel, L. J., “A music education immersion internship: Pre-service teachers' beliefs concerning teaching music in a culturally diverse setting”, Ph. D. dissertation, Michigan States University, 2002.

参考文献

- Abril, C. R., “Beyond content integration: Multicultural dimensions in the application of music teaching and learning”, Ph. D. dissertation, Ohio State University, 2003.
- Anderson, W. M. & Campbell, P. S. (eds.), *Multicultural Perspective in Music Education*, MENC, 1989.
- Anderson, W. M. & Campbell, P. S. (eds.), *Multicultural Perspective in Music Education 2nd edition*, MENC, 1996.
- Anderson, W. M., *Teaching Music with a Multicultural Approach*, MENC, 1991.
- Banks, J. A., *An Introduction to Multicultural Education 4th edition*, Allyn and Bacon, 2008.
- Consortium of National Arts Education Associations., *National Standards for Arts Education: What Every Young American Should Know and Be Able to Do in the Arts*, Music Educators National Conference, 1994.
- Drozd, K. S., “The effects of an elementary multicultural music curriculum about Micronesia”, Ph. D. dissertation, Hawai'i University, 2007.
- 平田亜矢「アメリカの音楽教科書 *The Music Connection* シリーズにおける Integrating the Curriculum の傾向性について」『武蔵野音楽大学研究紀要』32 巻, 2000, pp.81-97。
- 磯田三津子『音楽教育と多文化主義－アメリカ合衆国における多文化音楽教育の成立』三学出版, 2010。
- 川村恭子「*Music Educators Journal* にみる米国の多文化音楽教育の展開－1984 年から 1994 年までの記事を中心に」音楽教育史学会第 22 回大会 (於: 立教大学) 発表資料, 2009。
- 小島律子「アメリカの小学校音楽科の教科書におけるカリキュラム構成」『教科書フォーラム: 中研紀要』第 2 巻, 中央教育研究所, 2004, pp.14-21。
- Kuhn, W. F., “An examination assessing the impact of method of multicultural music instruction in a high

- school concert band rehearsal setting on students' preference for and identification of multicultural music”, Ph. D. dissertation, Nebraska University, 2000.
- Meidinger, V. F., “Multicultural music: Attitudes and practices of expert general music teachers in Oregon”, Ph. D. dissertation, Oregon University, 2002.
- 宮下俊也, 宇野加奈子「シルバー・バーデット「Making Music」カリフォルニア版の教師用指導書において「かえるのがっしょう」はどのように扱われているかー日本の教師用指導書との比較を通して」奈良教育大学教育実践総合センター『教育実践総合センター研究紀要』No.18, 2009, pp.131-139。
- 森田恭子『「主たる教材」から「学習材」へーアメリカの音楽科教科書 The Music Connection の分析ー』『武蔵野音楽大学研究紀要』29 卷, 1997, pp.177-190。
- 長尾愛作「Silver Burdett Ginn "The Music Connection" の全体像と鍵盤楽器の学習過程」『鳴門教育大学研究紀要 芸術編』Vol.13, 1998, pp.79-89。
- 曹念慈「教科書「Silver Burdett Making Music」の低学年の内容からみる諸芸術教科を統合する方法」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』XVII, 2005, pp.11-19。
- 矢野沙織「アメリカの音楽科教科書 Silver Burdett Making Music (2008) に見られる単元構成」中国四国教育学会『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第 54 卷, 2008, pp.555-560。
- Zaretti, J. L., "Multicultural music education: An ethnography of process in teaching and learning", Ph. D. dissertation, Indiana University, 1998.